

保育現場における造形表現と音楽表現の連携による表現活動

指導法に関する研究 I

——造形表現を中心とした考察——

本 田 郁 子
笹 谷 朋 世

摘要：本稿は平成 29 年度年度告示された「保育所保育指針」の改訂に伴い、領域「表現」のねらい、内容、内容の取扱いの示す表現活動の在り方について改めて考え、本研究を実践した地域の伝統文化である焼き物を題材とした造形表現と音楽表現の連携による表現活動の指導法を探ることを目的とした。本研究では保育園の年長児 15 名を対象に、造形遊びとして成形から焼成までを行う焼き物作り、音楽遊びとして制作した焼き物を使った音・リズム探しを実施した。その結果、成形では粘土の触感や、焼成では見た目、硬さ、音から土から焼き物への素材の変化を感じたり気付くなど、子ども達の五感を触発し、表現する力を養い、感性を育む活動として有用性を示した。また、自ら制作した焼き物を用いて音楽遊びを行うという見通しを持って活動することにより、造形表現活動のみで完結せずに、音楽表現活動への興味・関心へと発展させ繋げることができた。これらの結果より、造形表現と音楽表現の連携による表現活動の意義、その具体的な表現活動の指導法を示すことができた。本稿では造形表現活動を中心に考察し、音楽表現活動については別稿にて述べることとする。

キーワード：領域「表現」、造形表現、音楽表現、連携による表現活動指導法、焼き物 伝統文化

I. 課題意識と研究目的

平成 29 年度告示された幼稚園教育要領¹、保育所保育指針²、幼保連携型認定こども園教育・保育要領³の三法令は改訂・施行された。保育所保育指針では、3 歳以上の保育に関するねらい及び内容にける領域「表現」の目標として、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」⁴ことが示されている。表現領

域事項に大きな変更は無かったものの「内容の取扱い」には、次の二文「その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」、「様々な素材や表現の仕方に親しんだり」⁵と加筆された。その内容を読み解いてみると、素朴な事柄や体験の表現活動の具体例であり、本来の表現活動に今一度向き合い、考え直して欲しいという具体的意向が込められていると読み取ることができる。

表現活動には、造形表現、音楽表現、身体表現、言語表現が含まれるが、槇（2008）⁶は、保育が目指すのは、表現媒体の習得ではなく、表現の核になる部分を耕す時期であると述べている。また、表現の源は密接につながっていて、表現媒体間の循環が生じるような活動や、五感を豊かにし、身体機能や象徴機能を高められるような活動が望ましいとも述べている。しかしながら一部の幼児教育の現場ではあるが、造形作品や演奏の出来栄えという成果を重視した表現活動を目的としたり、造形表現、音楽表現、身体表現、言語表現がそれぞれ独立した表現活動に留まりがち傾向も伺える。松下、中村、小松（2018）⁷は総合的な表現を取り入れることで、領域「表現」の目標やねらいや内容を網羅でき、更には他領域の内容と関連性が生まれることを明らかにしている。本研究では表現の（イ）内容「⑤いろいろな素材に親しみ工夫して遊ぶ」「⑥音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」⁸に示される造形表現と音楽表現に着目し、二つの表現の連携による表現活動を実践した。

本実践において素材として粘土を扱い、実践を行った保育園の所在する地域の伝統文化である「焼き物」を取り上げた。幼児教育における造形表現活動では紙を多用する傾向もうかがえる。紙は子どもにとって加工しやすく、準備や片付けのし易さから保育素材として大変優れていることは言うまでもないが、幼児期には様々な素材に触れて欲しいと考える。佐藤（1990）⁹は、子どもがイメージを豊かに表現し易い最も適した保育素材として土粘土を挙げている。また、土粘土を素材として扱う際には、子どもは出来上がった作品を結果として捉えず作った作品で遊んだり飾ったりして活動を持続する機会が多いことから、子どもの気持ちを汲み取る為には土粘土に耐久性を持たせる為に焼くという活動が重要であるとも述べている。今回の実践園である愛知県尾張旭市は瀬戸市に隣接しており、瀬戸市は古くから焼き物が盛んな地域である。瀬戸市とその周辺は今でも生活の中に焼き物文化が残っている。実践園では土粘土遊びを積極的取り入れている。子ども達には、これまでに触れてきた土粘土が焼くと焼き物になることへの気づきや、子ども達が様々な素材や、地域の文化についても触れることができるような活動にしたいと考え、今回の造形表現活動では焼き物を制作することとした。幼児教育における焼き物制作は、一般的に置き物や、器等を制作することが多い。焼き物の魅力は、「粘土で表したものは、焼成することによって独特の美しさが生まれたり、生活の中で使えるほどの丈夫さが生まれ たりする。」¹⁰ことにある。つまり土が焼き物に変化すると、外見が変化し、強度や耐水性が生まれるのである。これに加えて本実践においては、土は焼成すると叩いた時の音も変化することや焼き物ならではの音色を味わうことにも着目した。音を楽しむ焼き物として、土鈴やベルの制作の候補に挙げたが、今回は、土が焼き物へ変化するという素材の変化を子ども達が体験することをねらいとして、簡

保育現場における造形表現と音楽表現の連携による表現活動指導法に関する研究 I

単に成形でき、素朴な焼き物である子どもの掌に収まる円盤型の焼き物を 2 個制作することとした。

子ども達は制作した焼き物を、その後の音楽表現活動で用いた。2 個の焼き物を打ち鳴らしたり、擦ったりして、「音探しとリズムによる音楽遊び」を行った。ラテン音楽で用いられるクラベスの様に、木片を打ち付けることにより楽器として機能するものや、日本（香川県）の讃岐石（サヌカイト）のように石を叩けば楽器になるものなど、自然の中にある身近な素材を楽器として機能させることは、人種を超えた音楽表現の一つであり、幼児期に体験して欲しい素朴な活動である。

本研究では保育指針における領域「表現」の「ねらい、内容、内容の取り扱い」について改めて捉え直し、保育園にて年長児を対象に、作品制作重視ではなく、素朴な体験を通して様々な表現する力を養えるような造形表現と音楽表現の連携による表現活動を実践した。実践の概要は、「造形遊び」では焼き物作りとして粘土成形から七輪での焼成までを行い、素材の変化を体験することをねらいとした。その後、制作した焼き物を用いた「音楽遊び」では音探しとリズム遊びを行ない、「クリスマス会での演奏発表」を実施した。身近にある土という素材から焼き物が出来上がるまでの工程を体験し、焼き物の音や音楽的な表現方法に親しむという郷土の自然の恩恵を受けながら行う表現活動は、領域「表現」の意図する素朴でありながら、「豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」¹¹活動になり得るのではないかと考えた。これらの実践をとおして、焼き物作り、造形表現と音楽表現の連携活動の意義と、その具体的な指導法を探った。

II. 研究方法

II-1. 対象者

愛知県尾張旭市内の A 保育園の年長児 15 名を対象に実践を行った。

II-2. 日時

20xx 年 11 月から 12 月の期間に造形表現活動と音楽表現活動それぞれ 2 回実施後、クリスマス会にて制作した焼き物を用いた演奏を披露した（表 1）。

第1回 造形遊び(粘土成形)	11月28日 (火)	10:00~12:00
第2回 造形遊び(七輪焼成)	12月 5日 (火)	9:30~12:00
第1回 音楽遊び (音色探し)	12月12日 (火)	10:00~12:00
第2回 音楽遊び (リズム)	12月19日 (火)	10:00~12:00
クリスマス会 (演奏発表)	12月25日 (月)	10:00~12:00

II-3. 方法

子ども達の活動をカメラとビデオカメラで撮影し、反復視聴による観察を行い、子ども達の発言や様子、保育者の言葉がけを記録した。また、後日指導補助をした保育士（園長と担任）2名へ、活動について聞き取りとしてコメントを求めて記載した。以上から分析・検討を行った。

Ⅱ－４．実践内容

造形表現活動においては、円盤型の焼き物を七輪陶芸の技法を用いて制作した。音楽表現活動においては、制作した焼き物を打ち鳴らしたり、擦ったり、と楽器として機能させる場合の奏法を探り、音楽遊びとリズム遊びを行った後、クリスマス会にて楽曲に合わせて簡単なリズム奏と歌の演奏発表を行った。

（１）造形遊び

本実践では作品成形から焼成までを子ども達が体験できるよう活動を計画した。活動の形式は、園児15名を3グループ（各5名）に分けた。本田が総合的な指導を行い、それぞれ各グループに笹谷、保育士（園長と担任）1名づつが補助的な指導を行った。

①第1回造形遊び（粘土遊びと焼成を前提とした成形）

粘土遊びの後、作品成形を行った。作品成形では、子ども達が簡単に成形ができるよう陶芸道具（タタラ板と伸ばし棒）や抜き型（トイレットペーパーの芯）取り入れた。また、粘土に空気が閉じ込められると、焼成の際に空気が膨張して爆発する恐れがある為、子ども達には、成形の要点として粘土に空気を閉じ込めないことを伝えた。使用した粘土は、七輪焼成による試作を行った結果、砂や鉄分を含んだ常滑山土を採択した。この粘土は鉄分を含む為比較的焼き締りが良く、砂を含むので急加熱や急冷に耐え、七輪焼成に適している。活動の詳細を以下に記す。

- ・活動場所：遊戯室（予めブルーシートを敷いておく）
- ・成形作品：直径約4cm厚み8mmの円盤形の焼き物を1人3個（1個は予備として成形）
- ・必要な材料と道具（1人当たり）

粘土約1kg、粘土板（木製30cm×30cm程度）1枚、伸ばし棒1本、タタラ板（8mm）2本、トイレットペーパーの芯1個、晒（20cm×20cm程度）1枚、竹串1本

- ・第1回造形遊び実践方法とタイムスケジュール（表2）

表2 第1回造形あそび(粘土成形)タイムスケジュール

時間	場所	活動内容	子ども達の活動	子ども達への援助・注意点
10:00	遊戯室	活動開始	本時の概要・目的を知る。	焼成後の作品を見せ、イメージを促す。
10:15		粘土遊び	粘土の触感や可塑性を楽しむ。	素材に慣れる為に自由遊びを促す。
10:45		成形	タタラ作りで作品を成形する。	実演による説明を行いながら成形指導・補助。
11:30		後片付け	粘土、道具、ブルーシートを片付ける。	粘土は水を含むと滑りやすいので注意を促す。
12:00		活動終了	次回焼成活動を行うことを知る。	乾燥作品は割れやすいので取扱いに注意を促す。

ア. 概要説明

子ども達に粘土遊びと粘土成形を実施することを伝えた。また、焼成後の作品を提示し、叩いたり、こすり合わせて焼き物の音を聞かせ、制作した作品で音楽遊びを実践することを伝えた。



【写真1】粘土遊びの風景

イ. 導入(粘土遊び)

一人分の粘土の内約半量を手渡し、手に持ってみる、手の平や指で押してみることから始めた。粘土の触感や可塑性を十分に味わいながら、ちぎる、ねじる、伸ばす、形を変える等自由遊びを行った。(写真1)



【写真2】伸ばす

ウ. タタラ作りによる成形の手順

導入で使用した粘土は乾燥し成形しにくい為、作品制作作用に残り半量の粘土を改めて配布する。成形は段階に分けて実演指導を行った後に、子ども達が行う形式で実施した。

① 伸ばす(写真2)

粘土を掌でだまかに伸ばした後、タタラ板と伸ばし棒を用いて粘土を均一の厚みに伸ばす。粘土に空気の混入を防ぐ指導のポイントとして、ちぎったり穴を開けたりせず、一塊の粘土から伸ばすよう伝えた。また、伸ばした際に空気の混入が見つかった場合は、竹串で穴を空けて空気を抜いて対処するよう伝えた。



【写真3】方で抜く

② 型で抜く(写真3)

板状に伸ばした粘土をトイレットペーパーの芯で丸く型抜きをする。



【写真4】仕上げ

③ 仕上げ(写真4)

作品の角が尖ったまま焼成すると、手への当たりが痛かったり、欠けやすかったりする。作品に晒を被せてその上から角をそつと撫で丸く整える。同様に裏も角を丸くする。作品の端にストローで紐を通す穴を一つ空ける。竹串でサインや番号を引っ搔いて描く。

②第2回造形遊び（七輪による焼成）

成形した作品は、子ども達が自由に観察できるように、園内の机の上でゆっくりと乾燥させた。完全乾燥した作品は、活動第2日目として、吉田（2002）¹²の手法を参考に七輪で焼成した。七輪焼成の特徴の一つに、焼成中の作品を観察できることがある。子ども達が素材の変化を体験するには適した方法であると考えた。焼成の手順は、焙り、素焼き、本焼きである。焼成の要点はゆっくりと温めることである。素焼きまでの段階で、作品を急激に熱すると熱膨張や水分の膨張より爆ぜる可能性がある。焼成の要点としては、焙りの段階では作品をしっかり温め水分を抜き、素焼きの段階では徐々に温めることである。本焼きでは急激に加熱・冷却するとひびが入る恐れがある。要点としては、徐々に火力を上げること、焼成後は七輪の淵に作品を置き徐冷する、若しくは水に入れて一気に急冷ことである。活動の詳細を以下に記す。

- ・活動場所：園庭
- ・必要な材料と道具（1グループ5名当たり）
七輪1台、焼き網、蚊取り線香缶、火ばさみ1本、ドライヤー1台、火ばさみ1本、ライター、木炭約1kg、新聞紙適量、水を入れたバケツ、軍手人数分
- ・焼成作品：成形作品一人3個（1個は予備）
- ・焼成活動実践方法とタイムスケジュール（表3）

表3 第2回造形あそび（七輪焼成）タイムスケジュール

時間	場所	活動内容	子ども達の活動	子ども達への援助・注意点
9:30	園庭	準備	自分の成形作品を持ってくる・観察する。	指導者が火熾しを行う。
10:00		活動開始	本時の概要・目的を知る。	火の取扱いに注意することを指導する。
10:15		焙り	作品を缶に入れて温める・観察する。	自由遊びを許可。焼成のポイントで呼びかける。
10:40		素焼き	作品を網の上に乗せる・観察する。	上からのぞき込まないように注意を促す。
11:15		本焼き	炭・作品を七輪の中に入れて・観察する。	指導者が焼成。送風時は注意を促す。
11:30		後片付け	軍手や火ばさみなどを片付ける。	作品は七輪の縁に置いて徐冷する。
12:00		活動終了	次回音楽活動を行うことを知る。	作品や七輪は熱いので触らないよう注意を促す。

ア. 準備（火熾し）

七輪の中に棒状に軽く丸めた新聞、その上に炭、割りばしを乗せ点火する。送風口から空気を送り炭に火を付ける。

イ. 概要説明

子ども達に作品は七輪で作品を焼成することを伝え、火の取扱いにおける安全指導を行った。注意点としては火傷と炭や作品の爆ぜに気をつけることである。子ども達には①作品や焼成道具は素手で触らず、軍手をする、火ばさみを用いること、②七輪を中心に半径50センチほどの円を水で描き、その中に入らないこと、七輪を上から覗きこまないこと、を伝えた。焼成活動と平行し外遊び等を許可し、指導者が観察のポイントで呼びかけたら戻ってくるよう指示した(写真5)。



【写真5】焼成の風景

ウ. 七輪焼成の手順

① 焙り(写真6)

缶の中に、作品を全て入れ20分程温める。途中10分程経過した段階で作品の上下を入れ替える。この際、自然吸気で送風し、送風口の幅は火力を見て適宜調整する。



【写真6】焙り

② 素焼き(写真7)

作品を焼き網の上に乗せる。約30分程かけて素焼きをする。徐々に加熱するよう最初は七輪の周辺に置き、次第に火力の強い中心に寄せていく。作品を裏返しながらむらなく焼けるようにする。焙りと送風は自然吸気で、送風口の幅は適宜調整する。



【写真7】素焼き

③ 本焼き(写真8)

炭を足し、冷えた炭の上に作品を入れる。1度に本焼きできる数は5個程度なので3回に分けて本焼きをする。ドライヤーで送風し徐々に火力を上げて本焼きを行う。橙色で艶が出るまで加熱するのが目安である。途中作品の焼き具合を確認しながら約10分から15分程焼成し、七輪の縁において徐冷し完成である(写真9)。



【写真8】本焼き

(3) 音楽遊び

造形表現活動で子ども達自ら制作した焼き物を用いて、第1回音楽遊び「焼き物はどのような音をするのか」「楽器として機能させる場合の奏法を見つける」、第2回音楽遊び「4分4拍子のリズムに親しむ」をテーマに、音楽遊びを2回実施した。その後日常保育で歌とオスティナート演奏の練習を続け、クリスマス会で演奏披露の場を設けた。



【写真9】完成作品

Ⅲ. 結果と考察

今回目指した表現活動の実践は、平成29年度年度告示された保育指針に示される表現活動の内容についてのねらいを改めて見直し、造形遊びとして焼き物制作と作品を使った音楽遊びを連携させた活動を計画し実践した。重視した点は、作品を完成させることなく、作品が出来上がるまでの過程である。また、伝統文化である焼き物を題材とし、造形遊び、音楽遊び共に素朴で単純でありながら本質を体験できる活動にすることに留意した。

Ⅲ-1. 五感に働きかける造形表現活動と活動の留意点

(1) 粘土遊びと焼成を前提とした成形

第1回目の造形遊び（粘土遊びと成形）において、子ども達は活動前から粘土に興味・関心が見られ早く触ってみたいという様子が見られた。その為子ども達は抵抗なく粘土に触り始め、遊びを始めることができた。粘土遊びでは存分に粘土の触感や可塑性を楽しんでいる様子だった。粘土に触り始めると子ども達から「冷たい」「ペタペタする」「重い」などの発言が多く聞かれた。指や掌で押す、ちぎる、捻る、丸める、紐状に伸ばす器状に成形する等それぞれに粘土遊びを行っていた。A保育園では定期的に土粘土に触れる活動を取り入れ土に慣れ親しんでいることも、抵抗なく粘土遊びができた要因の一つとも考えられる。粘土遊びを進める中で、子どもの一人が準備して置いておいた陶芸道具に興味を示し自ら伸ばし棒を用いて粘土を板状に伸ばし始めた。作品成形の際に使い方を説明する予定だったが、興味を示す子ども達が増えたので、自然な流れで作品制作に移行した。筆者が成形方法の説明を陶芸道具を使って実演すると、子ども達は素早く形が変化していく様子に驚き、「すごい」「やってみたい」など興味や意欲が感じられる発言があった。実演後、成形し始めると子ども達の中には、戸惑ったり、手間取っている様子も見受けられた。具体的には、粘土が乾燥してひびが入ったり、伸ばし棒で粘土を伸ばす際に粘土に棒が食い込んで均一の厚みに伸びない、粘土板に粘土が貼りついて剥がれなくなる、手順を忘れる等が挙げられた。焼き物作り、成形について保育士から次の感想や意見を得た。

- ・ 焼き物作りについて

「とても楽しんでた」「楽しんでた」

- ・ 成形の難易度について

「どちらかといえば簡単だった」「どちらかといえば難しかった」

- ・ 成形についてのコメント

「手順をきちんと教わることで、少しづつ道具の扱いに慣れていった。初めて触れる道具もある為、年長児だからこそできたように思う。」

「様々な体験からの取り組みが興味関心へとつながっていた。道具の扱いや行うコツなど専門的な指導はポイントとなった。」

保育士の感想や意見と筆者の子ども達の活動の様子の観察より、造形遊びは概ね楽しめる活動であったと考える。一方で成形の難易度について意見が分かれた。成形において子ども達は、粘土や道具の扱いや手順を追って制作することに、やや難しいと感じたようである。成形についての意見より、手順を段階に分けて説明と実演をすること、個々に手間取っている作業についてアドバイスをしたり、再度実演をすることが指導のポイントとなると考える。本実践の目的として、作品の結果ではなくその過程を重視している。子ども達が失敗を繰り返しながら粘土や道具の扱い方を経験することに意義がある。思い通りに成形できないと感じることは、より良い作品を作りたいという思いや意欲の表れであり、粘土遊びや成形で試行錯誤をして、土の特性を感じ、成形方法や道具の扱い方を知り、どのようにしたら目的の作品を成形できるのかを工夫すること、この過程こそが幼児期に経験しておきたい造形表現活動の一つであると考えられる。

(2) 七輪による焼成

成形した作品は園の屋内で1週間程乾燥させた。子ども達は、粘土が乾燥する様子を観察し、「硬くなった」「色が変わった」など色、触感、硬さの変化に気づく発言があった。第2回造形遊び（七輪による焼成）では火熾しの際、子ども達は七輪の周りで興味深く見守っていた。「煙いな」「焦げた匂いがする」等の発言が聞かれたが、嫌がる様子はなく、匂いを楽しんでいる様子であった。焙りの段階では作品が缶の中に納められ焼成変化が見えない為か、外遊びや屋内で遊ぶ子どもが多く、やや関心が薄いように見受けられた。一方、数名の子どもは自ら希望し缶や七輪を見守っていた。素焼段階では作品を網の上に乗せ、温度が上昇するにつれて作品の色が灰色から肌色に変化してくると、次第に七輪の周りに子どもが集まってきた。椅子を持ってきて、「あったかいね」などと話しながら、暖を取る様子が見られた。子ども達は作品を火ばさみで裏返し「色が変わった」などと発言が見られた。本焼き段階では、七輪から発せられる熱や激しい炎、粘土がオレンジ色に変化する様子や炎と粘土の輝きや熱を感じ、「すごい」「熱い」「太陽みたい」「マグマみたい」と物質の変化に対しての気づきを感じられる発言があり、興味深く観察していた。高温になった焼き物を七輪から取り出すと、「わー」という感嘆の声が上がった。作品は子ども達の昼食の間約1時間徐冷した。子

ども達は昼食後に、作品が冷めるのを待ちきれない様子で手に取って、「硬い」「つるつるしている」「ザラザラしている」「キラキラしてる」などと発言しながら触ったり打ち鳴らす様子が見られた。また、リズムをとりながら打ち鳴らしたり、お互いの作品を見比べたり、保育者に見せる、音を聞かせる様子も見られた。焼成について保育士から次の感想や意見を得た。

- ・ 焼成について

「七輪での焼成をととても楽しんでた」

焼成についてのコメント「粘土遊びをし、親しみ、自分で作成したものが様々な工程を経て変化するのが遊びと並行しながらポイントを得てすすめ貴重な体験に感じた。温度の上昇により、橙色になる場面は子ども達にとっても印象深く、感じた言葉が自然にあがっていた。」

「土粘土が、高温になり、真っ赤に焼けるところが印象的で、子どもの反応が大きかった。」

「七輪での焼成を体験させたいと思う」

「焼成をやるならば、今回のように保育としてのねらいを明確にして行うことで有意義なものになるように思う。」

- ・ 安全への配慮について

「十分に配慮できたと思う。火を扱うことは危険が伴うことなので1つの七輪に5名程の少人数で大人がついた点は良かった。通常の火ばさみでは子どもは長すぎて扱いにくそうであった。」

「火（火バサミなど）を扱う工程で、どの部分を子どもがやるのかを事前に、明確に決めておく必要があった。」

保育士の感想や意見と筆者の子ども達の活動の様子の観察から、子ども達は焼成を楽しんでいたと同時に、本焼きにおける粘土が真っ赤に変化する様子や炎の熱を感じることは印象的な体験であったことが伺える。実践を行なう際は保育士の意見に見られるように子ども達に何を体験させたいか「ねらい」を明確にすることが重要である。子ども達は七輪で作品焼成することにより、土が焼き物へ変化する様子を目の当たりで体験することができ、学びの芽生えを促す表現活動として有用であると考えられる。安全面への配慮については、今回の実践では特に危険な場面はなく安全面への配慮はできていたと考えるが、保育士の意見より、子どもが扱いやすい道具、例えば火ばさみをキッチン用のトングに代えること、子どもの行う作業を事前に明確に伝えることを改善することにより、より安全に、子ども達の焼成における参加割合を増やし、子ども達が自分で焼いているという実感の持てる活動に改善できる。焼き物制作、特に焼成活動は保育者からはやや難しいと捉えられるかもしれない。しかし、今回の実践から、指導者達が活動のねらいについて共通の認識を持ち、実践内容で示した焼成の留意点を踏まえて焼成の経験を積むこと、事前打ち合わせを十分

に行いチームワークで活動することで、七輪焼成は可能ではないだろうか。

子ども達は成形から焼成までを展開する中で、音、色、形、手触りなどを通じて粘土から焼き物への変化を捉え、感じ、言葉で表現している様子が見受けられた。レイチェル・カーソン(1996)は「『知る』ことは『感じる』ことの半分も重要ではない」¹³と述べている。成形から焼成までを体験できる陶芸活動は子ども達の触覚、聴覚、視覚、嗅覚など様々な感覚を触発し、表現する力を養い、感性を育む活動になり得るのではないかと考える。また、今回の実践における子ども達の様子、保育者の感想より、子ども達にとって一連の活動は楽しめる、興味を持てる活動であり、安全に実施できたと考える。活動のねらいや留意点、焼き物制作における成形と焼成の注意事項や要点を明確に示すことにより、領域「表現」に沿った造形表現活動の指導法を示すことができたと考える。

Ⅲ－２．造形表現と音楽表現活動連携の意義

表現領域である造形表現と音楽表現分野の活動の連携は近年でも研究例は多く、長崎・馬場(2017)¹⁴は、木育を取り入れた楽器作りと演奏実践を融合した表現活動を行い、幼児・児童の表現に対する意欲を効果的に引き出すことを明らかにし、木育の造形・音楽領域を問わない有効活用方法を見出す研究がなされている。また、小学校領域ではあるが、飯島・久本(2014)¹⁵らは、造形活動である「ものづくり」が個人で完結しがちなのに対し、音楽的要素を取り入れることにより、音楽を生み出すというさらなる発展ができることが連携の利点であると述べている。

(1) 素材の変化を音で感じる

本研究での特筆すべき造形表現と音楽表現の連携の意義は、上記の研究に加えて、伝統文化である焼き物に着目し、素材をそのまま表現活動に使用するのではなく、土という素材に先人の知恵を取り入れた七輪陶芸の技術が加えられ、土が焼き物という質感の違う素材に変化するという工程を子ども達が体験していることである。そして、素材が変化すると音も変化するという気づきまで表現活動を発展することができ、子ども達の好奇心を更に刺激することができたことに最大の意義があると言える。

(2) 造形表現活動から音楽表現活動へ興味・関心を繋げることができる

予め、第1回目の造形遊びの際に、子ども達に制作した作品で音楽遊びをすることを伝えておいた。その結果、子ども達は焼成後の作品を手に取り、触感や見た目の変化を確かめる事のみならず、叩いて音の変化を確認する姿が見られた。子ども達は、土を焼くと「見た目」「手触り」「硬さ」が変化するだけでなく、「音」も変化することに気づいたのである。子ども達の中にはリズムをとって打ち鳴らす様子も見られ、「音」から物質の変化を感じると同時に、音楽表現への興味・関心に繋げることができた。焼き物作りという造形表現活動にとどまらず、次の

音楽表現活動へ、更なる子ども達の期待を促すことができ、「素材の変化を体験できる焼き物制作」から「音探しとリズムによる音楽遊び」へ繋げる造形表現と音楽表現活動の連携した指導方法の実践例を示すことができたと考える。

IV. まとめ

本研究において、土から焼きものへ素材に変化をねらいとした造形表現活動、素材の変化から音の変化を体験し、音楽表現活動へと展開する、造形表現と音楽表現活動の連携の意義や指導方法を示すことができた。焼き物制作で特に指導や実践が難しいと思われるのは焼成であろう。日常生活において火を扱うことが減っている昨今、環境や安全面への配慮から、七輪で焼き物を焼成することは二の足を踏む活動であると想像できる。しかし、焼き物という地域の伝統文化を知ったり、身近な素材である土が焼き物に変化する様子を間近に見たりすることは、五感をとおして豊かな表現力を育むことのできる表現活動の一つとして、保育現場で取り入れて欲しいと考える。

今後の課題としては、焼成への理解や、焼成手順の困難さを改善することが挙げられる。本研究では筆者が中心に焼き物制作の指導を行った。しかし、現場の保育士・幼稚園教諭が、子ども達と楽しみ、寄り添いながら日常の保育の中で表現活動を展開・指導するのが本来の幼児教育の姿ではないかと考える。改善方法として、今回は七輪を用いて本焼きまで行ったが、その前段階の素焼きで作品を仕上げることもできる。素焼きまでならば工程も少なく、本焼きに比べて炎も弱いので、子ども達への安全面への不安も少なく、焼成活動の入門として取り入れ易いのではないかと考える。その後本焼きのできる七輪焼成へも興味を繋げていけたらと考える。今後も焼き物制作の方法や、特に焼成において、幼児教育の現場で取り入れ易い実践方法や指導方法を示すことができるよう研究を深めていきたい。

本稿においては、焼き物作りをとおした造形表現活動と、造形表現の観点から二つの表現活動の連携の意義や指導法について考察した。音楽表現については別稿で述べていくこととする。

謝辞

本研究にご協力頂いた保育園の皆様及び、ご指導頂いた自然保育研究会の皆様深くお礼を申し上げます。

【注】

¹ 文部科学省「幼稚園教育要領（平成 29 年告示）」フレーベル館、2017 年。

² 厚生労働省「保育所保育指針（平成 29 年告示）」フレーベル館、2017 年。

³ 内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成 29 年告示）」フレーベル館、2017 年。

⁴ 厚生労働省「保育所保育指針 平成 29 年告示」2017 年

<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000.../0000160000.pdf> (2018 年 9 月 20 日閲覧) p.45

⁵厚生労働省「保育所保育指針 平成 29 年告示」2017 年

<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000.../0000160000.pdf> (2018 年 9 月 20 日閲覧) p.47

⁶槇英子「保育をひらく造形表現」萌文書林、2008 年 pp.10-11

⁷ 松下茉莉香、中村礼香、小松恵理子「こどもの表現活動の効果的指導方法に関する研究」鹿児島女子短期大学紀要第 54 号、2018 年 pp.81-90

⁸厚生労働省「保育所保育指針 平成 29 年告示」2017 年

<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000.../0000160000.pdf> (2018 年 9 月 20 日閲覧) p.46

⁹ 佐藤智朗「保育素材としての土粘土について (2) 保育現場でできるテラコッタ」日本保育学会大会研究論文集 (43) 1990 年 pp.186-187

¹⁰ 文部科学省「小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 図画工作編」2018 年 p120

¹¹厚生労働省「保育所保育指針 平成 29 年告示」2017 年

<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000.../0000160000.pdf> (2018 年 9 月 20 日閲覧) p.45

¹²吉田明「自分でやける 何でもやける 決定版 七輪陶芸入門」2002 年、主婦の友社

¹³ レイチェル・カーソン「センス・オブ・ワンダー」新潮社、1996 年 p.24

¹⁴長崎結美・馬場拓也「幼児・児童を対象とする 音楽と造形を融合した総合的な表現活動に関する研究—「木育」を取り入れた楽器づくりと演奏実践を通して—」帯広大谷短期大学地域連携推進センター紀要第 4 号、2017 年 pp.53-62

¹⁵飯島淳・久本綾「小・中学校教育課程における表現活動に関する研究—ものづくり・音づくり・音楽づくりを連携した創造的表現活動の試み—」千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第 277 集、2014 年 pp.43-53

本田郁子 (名古屋経営短期大学 講師)
笹谷朋世 (日本福祉大学 助教)